

『カナの婚礼』 ヨハネの福音書 2章 1~12節

1. 婚礼の出来事

本日は、アドベントの第2週です。アドベントとは「到来」という意味であり、イエス様が人となってこの世に生まれて下さったこと、その第一の到来を喜び祝うクリスマスに備えていく時です。それだけでなく、アドベントは、イエス様がもう一度来て下さること、その第二の到来によって私たちの救いを完成して下さることを待ち望む時もあります。

幼子のイエス様に会いに来た二組の内の東方の博士は、ベツレヘムに向かっていく歩みは、星を通して彼らをイエス様のみもとにまで導かれました。マタイの福音書2章10節には「**その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。**」とあります。彼らにとってイエス様に出会えたことは、それほど嬉しいことだったのです。実に彼らが東の方からこの場所に至るまでは、並々ならぬ犠牲と努力が必要だったはずです。そして彼らはその最上の喜びをもって、**幼子イエス様**の前にひれ伏し、礼拝しました。そして宝の箱をあけて黄金、乳香、没薬をささげました。この過去に起きた御言葉から私たちは学び、来るべき将来に備えたいと願います。

さて、2章には、他の三つの福音書にはない出来事が二つ記されています。本日の箇所には、ガリラヤのカナにおける婚礼の宴席で、イエス様が、水をぶどう酒に変えるという奇跡を行ったことが語られています。

カナの婚礼には、イエス様の母とイエス様、また弟子たちが招かれて列席していました。結婚は人間の人生における大事な節目であり、一つの家庭が誕生し、新しく船出する時です。そのような人間の営みを祝福し、喜びを分かち合って下さるイエス様の姿がここに描かれています。

ところがこの楽しい宴会の最中に、ぶどう酒が足りなくなりました。「もうお酒はありません」となってしまうのは、招いた新郎新婦にとって不名誉なことです。「どうしよう」とこの宴会の世話をしていた女性たちの間に動搖が走りました。その中にはイエス様の母もいました。母はイエス様のところに来て、「**ぶどう酒はありません**」と言いました。そもそも母は、「どうしましょう」という相談でもなければ、「こうしてください」という願いでもなくて、事実を報告しているだけです。それに対してイエス様は「**女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。**」と言いました。母親に向かって「**女の方**」はないだろうと思うし、「**あなたはわたしと何の関係がありますか。**」もとても冷たい言い方に思われます。イエス様が「**何の関係がありますか**」と言っているのは、ぶどう酒がなくなったことではなくて、母との関係のことなのです。「あなたとわたしは関りがない」と言ったのです。ですからこれは、母親に対して「そんなひどいことを言うなんて」と思わざるを得ない言葉です。

しかし、そこには「**わたしの時はまだ来ていません。**」という言葉が付け加えられています。それが、「**あなたはわたしと何の関係がありますか。**」と言った理由です。イエス様の母に対するこの言葉は突き放すような、冷たく感じられるものです。ところがそれを聞いた母は、「**給仕する人たち**」に「**あの方が言わることは、何でもしてください。**」と言います。イエス様が何か行動を起すことを予感し、期待しているような言葉です。そしてその通りに、イエス様は「**給仕する人たち**」に、そこにあった「**水がめ**」に水をいっぱい入れるように命じ、その水が上等のぶどう酒になる、という「**奇跡**」が行われたのです。

この「**奇跡**」のおかげで、婚宴は滞りなく行われました。新郎新婦は恥をかかずにつみました。それどころか、世話役は花婿を呼んで、「**みな、初めに良いぶどう酒を出して、酔いが回ったころに悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておきました。**」とほめたのです。イエス様の「**奇跡**」のおかげで花婿は面目を施したのです。それもまた、イエス様がこの婚礼を祝福していることの現れだと言えます。

2. 最初のしるし

これが、本日の箇所に語られているガリラヤのカナにおけるイエス様の「**奇跡**」です。この「**奇跡**」について 11 節

に「イエスはこれを最初のしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」と語られています。これはイエス様の行った最初の「奇跡」です。そしてその「奇跡」のことをヨハネの福音書は「しるし」と言っています。ヨハネがここで「奇跡」ではなく「しるし」と書く理由があります。人間には「奇跡」と考えることでも、それはイエス様が神の子であることを示す「しるし」に他ならない、とヨハネは考へているのです。ここでの「しるし」とは、「証拠」を意味しますが、ヨハネは、この福音書におけるイエス様は、「しるし」を行う方として描いています。本日の最初の「しるし」から始まって、この福音書にはイエス様の行った七つの「しるし」が記録されています。七つ目の、最後の「しるし」は、11章に語られている「ラザロの復活」です。ヨハネの福音書は、その七つの「しるし」即ち奇跡を軸にして、イエス様のご生涯を語っているのです。そしてこの11節には、イエス様はこの「しるし」を行うことによって「ご自分の栄光を現された」とあります。イエス様の行った「奇跡」は、イエス様の「栄光」をこの世に現すための「しるし」なのです。

イエス様の「栄光」とは、1章14節に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」と語られていましたその「栄光」です。神のひとり子、まことの神である方が人間となってこの世に来て下さり、私たちの間に宿って下さった、それによって、私たちの罪の闇の中に、神の「栄光」が輝いたのです。イエス様の「奇跡」は、その「栄光」の「しるし」です。その「しるし」を見て、弟子たちはイエス様を信じたのです。

それこそが、この福音書が書かれた目的だったことが20章30~31節に「イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていません。これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためにあります。」と語られています。ヨハネの福音書がイエス様の行った「しるし」を中心にその生涯を語っているのは、その「しるし」を通して私たちが、イエスは神の子であり、神から遣わされた救い主であると信じて、イエス様による「いのち」を受けるためなのです。この最初の「しるし」を見て弟子たちがイエス様を信じたというのは、先ずは弟子たちの間で、この福音書の目的が実現し始めた、ということです。

3. きよめの水が喜びに

さて、六つの「水がめ」にいっぱいに汲まれた水が上等のぶどう酒に変えられたのですが、その「水がめ」は6節によれば、「ユダヤ人のきよめのしきたりによって、石の水がめ」でした。この「水がめ」の元々の用途がこのようにわざわざ語られているのは意図的なことです。ユダヤ人たちの間では、身をきよめるための水が用いられていました。それは体を清潔にするという衛生的なことではなくて、神の民として、神の御前に出るためには、この水で罪の汚れを落とし、きよくならなければならないということです。罪の汚れを負っている人間は、そのままでは神の御前に出ることはできない、神との交わりに生きることはできないのです。この「水がめ」はそのきよめの水を入れたためのものでした。そこに満たされた水を、イエス様はぶどう酒に変えたのです。このぶどう酒は、婚礼の祝宴に出されるものです。新郎新婦の結婚を人々が祝福し、その喜びを分かち合うために欠かすことのできないものです。イエス様もこの宴会の席について、人々と喜びを分かち合っておられるのです。罪のきよめのための水が、イエス様と共に喜び祝う祝宴のぶどう酒に変えられたというこの「奇跡」は、イエス様がこの世に来られたことによって、神と人間との関係が決定的に変化したことを象徴的に現しています。

イエス様が来られるまでは、罪ある人間は自らをきよくしなければ御前に出ることができませんでした。罪の汚れをかかえたままで神との交わりを持つことはあり得なかったのです。しかし神のひとり子であるイエス様が人間となってこの世に来て下さったことによって、私たちは、自ら身をきよめることなしに、神の子であるイエス様の前に出ることができるようになったのです。罪人である私たちを、イエス様が招いて下さり、祝福して下さり、私たちとの交わりに生きて下さり、喜びを分かち合って下さることが実現したのです。

それはイエス様がこの後、私たちの罪をご自分の身に背負って十字架にかかる死んで下さったことによってこそ

実現した救いです。十字架の死と復活に至るイエス様のご生涯の全体によって、私たちの罪は赦され、救いが実現しました。それによって私たちは、自分で自分をきよくすることなしに、イエス様と喜びの宴席に共に着くことができるようになったのです。イエス様が与えて下った良いぶどう酒によって大いに盛り上がったこのカナの婚礼の祝宴は、イエス様による罪の赦しの恵みを受けた私たちが、主に招かれて主のもとで喜び祝う救いの祝宴を先取りするものとなつたのです。

ヨハネは、この箇所の中で、「**しるし**」には三つほどの意義があることを教えています。一つ目は、「**しるし**」は人間の力が尽きた時に示されることです。二つ目は、「**しるし**」はイエス様の言葉に従う時に起こりました。三つ目は、「**しるし**」は素晴らしい結果を生じることです。このぶどう酒は、先に用意されていたものよりもずっと美味しいものでした。

4. わたしの時はまだ来ていません

イエス様の最初の「**しるし**」のこのような意味を見つめる時、あの母との不可解な会話の意味も見えてきます。母が「**ぶどう酒がありません**」という事実のみを語ったのも、イエス様が母に「**女の方**」と語りかけ、「**あなたはわたしと何の関係がありますか。**」と言ったのも、この後行われる、水をぶどう酒に変えるという「**しるし**」、「**奇跡**」が、身内である母との関係において、母がイエス様に願ったので、イエス様が他ならぬ母の頼みだからとそれに応えてなされたものではない、ということを示しているのです。この「**奇跡**」は、イエス様の身内への愛によってなされたのではありません。罪の汚れのために神の御前に出ることができない、しかも水で洗ったぐらいでは本当にはきよくなることができず、神との良い交わりを失っている私たち人間を主が深く憐れんで下さり、ご自身が人間となってこの世を歩み、私たちの罪と汚れを全てご自分の身に引き受けて十字架にかかるて死んで下さることによって、私たちの罪を赦し、私たちが赦された者として神の御前に出て、神との良い交わりを喜ぶことができるようにして下さる、そのイエス様の深い恵みの御心によってこそ、この「**しるし**」はなされたのです。

「**わたしの時はまだ来ていません。**」という御言葉も、この救いが本当に実現する「**わたしの時**」、つまり十字架の死と復活の時は、この時点ではまだ来ていないということです。伝道者の書3章11節には「**神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠を与えられた。しかし人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない。**」とあります。しかしそう言いつつ、ご自分の十字架の死と復活によってこそ実現する救いを先取りするようにして、イエス様はこの「**しるし**」を行なって下さったのです。つまり「**わたしの時はまだ来ていません。**」という御言葉は、イエス様による救いは十字架の死と復活においてこそ実現するのだ、ということを示しているのです。母は、これらのこと完全に理解できていたわけではなくても、イエス様の思いを感じ取っていたので、一見冷たく突き放すように感じられるイエス様の御言葉にも関わらず、「**あの方が言われることは、何でもしてください。**」と「**給仕する人たち**」に言ったのです。

5. 奉仕の働きの中で

この最初の「**しるし**」において、この「**給仕する人たち**」が大事な役割を果たしていることにも注目したいと思います。イエス様の命令に従って召し使いたちが、六つの「**水がめ**」の縁まで水を満たしたのです。この「**水がめ**」は、「**二あるいは三メトレテス入りのもの**」だったと6節にあります。聖書の付録を見ると、一メトレテスは約39ℓとありますから、このかめは約80 ℓ (80 kg) ないし約120 ℓ (120 kg) の容量です。その「**水がめ**」六つに水を汲んで満たすのはかなりの作業だと言えます。

そしてイエス様は彼らにさらに、「**さあ、それを汲んで、宴会の世話役のところに持つて行きなさい。**」と命じたのです。9節には「**宴会の世話役は、すでにぶどう酒になっていたその水を味見した。汲んだ給仕の者たちはそれがどこから来たのかを知っていたが、世話役は知らなかった。**」とあります。つまりイエス様の命令に従って水を汲んだ「**給仕の者たち**」だけが、自分たちが「**水がめ**」に満たした水がぶどう酒に変わったという「**奇跡**」を体験し、それ

がイエス様の力によってなされたことを知っていたのです。

ヨハネの福音書がこのような細かい経緯を語っているのは、やはりそこに象徴的な意味を見ているからです。この「**給仕の者たち**」こそが、イエス様の最初の「しるし」を体験したのです。そこに現されているイエス様の神の子としての「**栄光**」を見たのです。花婿花嫁も、宴会の世話役も、またこの宴会でそのぶどう酒を飲んだ人々も、イエス様によるその「**しるし**」に気づくことはありませんでした。このぶどう酒がイエス様の力による「奇跡」によるものであることを知ることができたのは、「**給仕の者たち**」だけだったのです。彼らは、イエス様の命令に従って、「**水がめ**」に水を満たし、それを汲んで持って行くという奉仕をしたからこそ、そのことを体験し、知ることができたのです。

それと同じことが私たちにおいても起ります。私たちが、イエス様の力ある恵みの御業を体験し、それがイエス様による「**しるし**」であることに気づき、そこに示されている神の子としての「**栄光**」を見る能够なのは、主の御言葉に従って奉仕することによるのです。「**給仕の者**」と訳されているのは「**奉仕する人**」という言葉です。イエス様の弟子であるキリスト者は、一人ひとりが主に「**奉仕する人**」です。私たち一人ひとりに、イエス様が、あなたはこのことをしなさい、と命じている働き、奉仕があるのです。キリスト者として生きるとは、主が自分に求めておられる奉仕とは何かを祈り求め、主のご命令に従って奉仕しつつ生きることです。そしてそのように主から与えられた具体的な奉仕の業を担っていくことの中でこそ私たちは、イエス様の恵みを体験し、イエス様の力を感じ取り、神の子としてのイエス様の「**栄光**」を見る能够なのです。主は私たちに、出来もしないこと、無理なことを命じることはありません。一人ひとりの賜物に応じて、それぞれに相応しい、また可能な奉仕を与えて下さるのです。

この話において「**給仕の者**」に命じられたのは、「**水がめ**」に水を満たすこと、それを汲んで運んで行くことでした。それは肉体的には力のいることだったと思いますが、決して難しいことではありません。彼らはその単純な作業を、主の命令に従ってして行く中で、イエス様の大きな恵みの御業を、その力と「**栄光**」を見る能够なのです。イエス様が私たちに求めているのは、このような肉体的な奉仕だけではありません。力仕事は出来ない者でも、祈ることはできます。兄弟姉妹のために執り成し祈ることは、イエス様の救いの御業の前進のための大切な奉仕です。

6. 祝宴に招かれている

このことは、11 節に「**イエスはこれを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。**」とあったこととも通じます。この「**しるし**」がなされたことによってイエス様を信じたのは、弟子たちだったのです。まだ弟子になっていなかった人々が、この「**しるし**」を見て、イエス様を信じるようになり、弟子になった、というのではないのです。「**しるし**」を「**しるし**」として受け止められる能够なのは、既にイエス様に従っている弟子たちなのです。単なる「奇跡」と「**しるし**」の違いがそこに語られていると言えることができます。「奇跡」は、誰もが驚く出来事ですが、それによって信仰が与えられるわけではありません。しかし、その「奇跡」がイエス様に従っていく信仰の歩みの中で受け止められる時に、それはイエス様こそ神の子、救い主であることを確信させる「**しるし**」となるのです。

イエス様が水をぶどう酒に変えて下さったカナにおける婚礼は、イエス様の十字架の死と復活によってこそ実現する救いの先取りであり、私たちが罪を赦され、神の子とされて、主と共に喜びの宴席に着くことができる、その喜びの祝宴を先取りしたものでした。私たちも、その祝宴に招かれています。それが、この後共にあずかる聖餐です。聖餐のパンと杯は、イエス様が私たちの罪を赦し、神の子として下さるために十字架にかかる死んで下さったこと、そこで裂かれたイエス様の体と流された血とを表すものです。洗礼を受け、イエス様による救いの恵みにあずかった私たちは、聖餐において、イエス様の十字架と復活によって与えられた罪の赦しと、永遠のいのちの約束をこの体をもって味わい、体験します。そしてこの聖餐は同時に、世の終りの救いの完成において、復活と永遠のいのちを与えられた私たちが、主のみもとで、全ての兄弟姉妹と共に、主を中心におられる食卓に着く、その喜びの食卓の先取りでもあります。カナの婚礼の恵みと喜びを、私たちは聖餐において体験しつつ、主がもう一度来て下さって私たちの救いを完成して下さることを待ち望むのです。